

## 図形楽譜を活用した音楽鑑賞の学習指導

### ーモチーフおよび旋律の反復と変化を認識する一助としてー

Using Graphic Notation for Teaching Music Appreciation as an Aid to Recognizing Repetition and Variation in Motifs and Melodies

小島 千か

KOJIMA Chika

**要約：**音楽鑑賞教育において、図形楽譜など視覚的なものを用いて学習者に音楽の要素や構造の理解を促そうとする方法がある。小学校音楽科教科書の鑑賞学習頁では、主な旋律の図形楽譜が示されているが、その多くが中学年までである。高学年になるとそれが五線譜で示されており、五線譜での把握が求められている。しかし、図形楽譜はリズムや旋律を直感的・感覚的に捉えることができる点で五線譜より勝る。そこで、本研究では、モチーフおよび旋律の反復や変化といった、同じ音型でも音高が違うものや、同じリズムでも異なる音から成るものの把握に図形楽譜を活用した。大学生と小学生を対象に、ホルスト作曲《惑星》より「木星」の鑑賞学習指導において、主要旋律の図形楽譜を用いたところ、モチーフおよび旋律の反復や変化の気づきを促すことができた。また、音楽の進行に伴って図形楽譜を基にした教師の説明の必要性も明らかになった。

**キーワード：**図形楽譜，主要旋律，モチーフ，音楽鑑賞，小学校

## I はじめに

音楽鑑賞指導では、学習者が音楽を聴きながら音楽の要素や構造を把握できることが目指される。しかし音楽の要素のそれぞれや要素と構造は、分離し難いものである上に時間と共に次々と展開されて消えていくため、学習者は聴き取ったことを確認したり実感したりすることが難しく、教師も学習者が聴取できるように指導することや学習者の聴取の状況を把握することが難しい。そこで、学習者に音楽の要素や構造を把握させ、学習者の聴取の状況を把握する一助として、視覚を活用した学習指導法がある。それらは、これまでの研究では大きく2種類に分類できると考えられる。一つの方法は、色、幾何学的図形、記号などで表される音楽的特徴を見ながら音楽を聴くことによって音楽の要素や構造を把握させようとするものである。Graça Boal Palheiros, Jos Wuytack (2006)は、非音楽家を教えるための戦略として、音楽作品の全体的展開を視覚的に表現したミュージックグラムを提案している。また、小学校音楽科教科書の鑑賞学習の頁には、主な旋律の特徴が帯や丸などの図形楽譜として示されている。もう一つの方法は、子どもたちが聴き取ったり感じ取ったりしたことを自ら色や形、線などで表現することによって、音楽の要素や構造を把握させようとするものである。この方法は、ある程度決まった型の中で図形楽譜をつくるもの(小島律子 2011)と、線、色、形を用いた自由な表現(小島千か 2017)とがある。これらの視覚を活用した鑑賞学習指導は、主な旋律やその展開が視覚化された図を見たり自ら音楽の特徴を視覚化したりする行為によって、ただ単に音楽を聴くよりも主体的に音楽の要素や構造を把握できるようにすることが目指されてい

るが、実際の学校音楽科授業ではあまり活用されていない（小島 2014）<sup>1)</sup>。

さて、上記二つの方法を図形楽譜の視点で比較した場合、音楽を聴きながら実際の音楽を簡略化した図形楽譜を見るか、聴いて感じたことを図形楽譜として表現するかの違いがあり、それらは正解の図形楽譜と独自の図形楽譜といえるかもしれない。筆者はこれまで、主な旋律に着目できるよういくつかの図形楽譜を用意し、子どもが音楽を聴きながら相応しい図形楽譜を選んだり、反復しながら変化する旋律の特徴について、子どもが聴き取り感じ取ったことを図形楽譜に書き込んだりする方法を行ってきた（Kojima 2020）。これは、正解の図形楽譜を選んだり、正解の図形楽譜にさらに書き込んで独自の図形楽譜をつくったりするもので上記二つの方法を折衷して、より学習者の思考・判断を促すことを目指したものである。本研究はその延長であり、音楽鑑賞指導で把握が求められる音楽の要素や構造のうち旋律の反復と変化、さらにモチーフにも着目し、それらの把握のために学習者が主体的に思考・判断し、指導者はそれを促せるような学習指導の方法として図形楽譜を用いた。教科書に掲載されているホルスト作曲《惑星》より「木星」を例に大学生と小学生を対象に授業を行い、小学校音楽科授業での活用を促すことができるようその効果を明らかにする。

## II 小学校音楽科教科書における図形楽譜

小学校音楽科教科書の鑑賞学習の頁に、主な旋律が帯や丸などの図形楽譜として示されている。現在出版されている教育芸術社と教育出版、2社の2019年検定で2020年に発行された教科書の中では、教育芸術社において多用されており（表1）、その特徴としては、2つの旋律を比較するものが多い。それらは、特徴の異なる2曲であったり、同一曲では例えば三部形式でABAと変化する旋律であったりする。

表1 教科書の鑑賞学習における図形楽譜の使われ方

出版社	学年	曲名	作曲者	図形楽譜が表すものと特徴
教育芸術社	1	組曲《くるみ割り人形》から行進曲	チャイコフスキー	2つの主な旋律をスキヤットを伴って示す
教育芸術社	2	ミッキーマウスマーチ、メヌエット	ジミー ドット、ベツォルト	最初の4小節の主旋律と拍
教育芸術社	2	トルコ行進曲	ベートーヴェン	2つの主な旋律と拍
教育芸術社	2	エンターテイナー	スコット ジョブリン	主な旋律の前半と後半を色を変えて示す
教育芸術社	3	メヌエット	ベートーヴェン	ABAと変化する主な旋律
教育芸術社	3	トランペット吹きの休日、《12の二重奏曲》からアレグロ	アングソン、モーツァルト	最初の4小節の主旋律
教育芸術社	3	《アルルの女》第1組曲から鐘	ビゼー	ABAと変化する主な旋律、Aでは主な旋律と鐘の旋律
教育芸術社	4	組曲《動物の謝肉祭》から白鳥と堂々たるライオンの行進	サン＝サーンス	主な旋律、白鳥は伴奏も
教育芸術社	4	《アルルの女》第2組曲からファランドール	ビゼー	2つの旋律(王の行進と馬のダンス)
教育芸術社	4	《アルルの女》第2組曲からメヌエット、クラリネットポルカ	ビゼー、ポーランド民謡	最初の4小節の主旋律
教育芸術社	4	《ペールギュント》第1組曲から朝の気分	グリーグ	主な旋律
教育芸術社	5	アイネ クライネ ナハトムジーク 第1楽章	モーツァルト	旋律の重なり方の違いを三種類
教育出版	2	そりすべり	アングソン	ABAのA部分の2つの主な旋律
教育出版	3	ユモレスク	ドボルザーク	3つの主な旋律
教育出版	3	白鳥	サン＝サーンス	チェロの旋律とピアノの動き
教育出版	5	つるぎのまい	ハチャトゥリヤン	伴奏の反復、合いの手、2つの主な旋律

教育芸術社1年生のチャイコフスキー作曲《くるみ割り人形》より「行進曲」では、2つの主な旋律の図形楽譜に「ぱっばばぱぱっばぱっばぱっばー」と「たらったらったらったらっ〜」というスキヤットが示されている。これらは呼びかけ合う旋律であり交互に演奏されるが、指導書（p. 103）では、口ずさんだり出てきた旋律の図形楽譜を交互に指したりしながら聴くように示されている。2年生以降は、主な旋律の図形楽譜にスキヤットは示されていないが、指導書では、ラララなどで口ずさんだり（2年生，p. 46）、図形楽譜を指でたどったり（2年生，p. 93）することが示されている。5年生のモーツァルト作曲《アイネ クライネ ナハトムジーク》第1楽章では、「全員で同じ旋律を演奏する部分」「主な旋律と伴奏を重ねて演奏する部分」「たがいに呼びかけ合うように演奏す

る部分」という3種が図形楽譜として示されており、指導書（p. 43）では、図形楽譜を使って旋律の動きや重なり方を確認することが示されている。

このように、教育芸術社では、主な旋律の図形楽譜が示されており、表1に示す通り2年生から4年生で多用されている。6年生では、図形楽譜が用いられなくなり主な旋律が五線譜で示されている。教育出版では、図形楽譜が示されている数は少ないものの同様の傾向で主な旋律の図形楽譜が示されており、6年生では示されていない。また、5年生の《つるぎのまい》はABA'の三部形式であり、「AとBの主な旋律」「Aの伴奏の反復」「合いの手の旋律」といった全曲を通した旋律の特徴が図形で示されており、B部分が3拍子に変わることも図示されている。

以上から、小学校音楽科教科書におけるこれらの図形楽譜は、音楽を鑑賞するにあたり聴き取るべき主要旋律が示されたものであり、特に特徴の異なる旋律が2つ示されているのは、その違いを感覚的に捉えさせようというねらいが考えられる。また、6年生では用いられていないのは、旋律を感覚的ではなく五線譜で把握できるべきとの見解からであると考えられる。しかし、教科書に示されているようなリズムや旋律の動きを大まかに示す図形楽譜は、リズムや旋律を直感的・感覚的に捉えることができるという意味で五線譜よりも勝る。そのような五線譜にはない良さを活かして図形楽譜を学習者が見たり指導者が指導に活用したりすることにより、学習者が思考・判断し主体的にリズムや旋律、また曲の全体構造なども把握できる活動につながられるのではないかと考えられる。

### Ⅲ 《惑星》より「木星」の主な旋律の図形楽譜および反復と変化

教育芸術社6年生教科書における鑑賞学習の頁に、ホルスト作曲の組曲《惑星》より「木星」が掲載されている。「ア→イ→ア→終わりの部分」という4つの部分構成であることと、アの部分で現れる主な4つの旋律とイの部分出だしの旋律が五線譜で示されており（図1）、図形楽譜は示されていない。

\*この曲は、大きく分けて4つの部分からできています。

ア → イ → ア → 終わりの部分

ア

\* 右の①②③④の旋律がかわるがわる現れます。それぞれの旋律の出だしではホルンが活躍し、いろいろな楽器に引きつがれていきます。



イ

\* 下の旋律が弦楽器を中心に演奏され、だんだん楽器が増えていきます。



図1 「木星」の主要旋律（教育芸術社6年生教科書 pp. 16-17 より）

アの部分の主な4つの旋律は、それぞれの出だしでホルンが活躍し、かわるがわる現れることが示されている。指導書の学習指導展開例（pp. 40-41）では、オーケストラの楽器の音色、オーケストラの響き、「ア→イ→ア→終わりの部分」という4つの部分構成、アとイの曲想・拍子の違い、アが再現された時に最初のアから変化したことなどが学習指導項目として示されている。

田村（2004, p. 73）は、「多様性の統一」が名曲の条件だとすれば、多数に見える素材の源となる根源的素材と、その変形の様態を明らかにすることが名曲の分析になるとして、「木星」を分析している。それは、冒頭の音型（図2）がほとんどの主要主題の源であるという分析である。



図2 「木星」のモチーフ（田村，2004，p. 79より）

このような音楽を形づくる最小単位であるモチーフの把握は、学習指導要領には示されていないが、表現においても鑑賞においても音楽を理解する上で重要な内容の一つである。ただ、このモチーフは変形しても用いられるため、たとえば音高違いでも同じ音型であれば同じと捉える必要があるが、五線譜上の音符を見たり耳で聴いたりしただけでは分かりづらい。そこで、学習者は旋律の動きをおおまかに示す図形楽譜を見ながら聴き、教師は音楽の進行に合わせて図形楽譜で指し示すことをすれば、学習指導が行いやすいのではないかと考えた。図3は、筆者が考案したアの部分で現れる4つの旋律の図形楽譜である。4つの旋律は、教科書（図1）では登場する順に示されているが、この図形楽譜では、ランダムに配置してある。図1の①がB、②がD、③がA、④がCである。

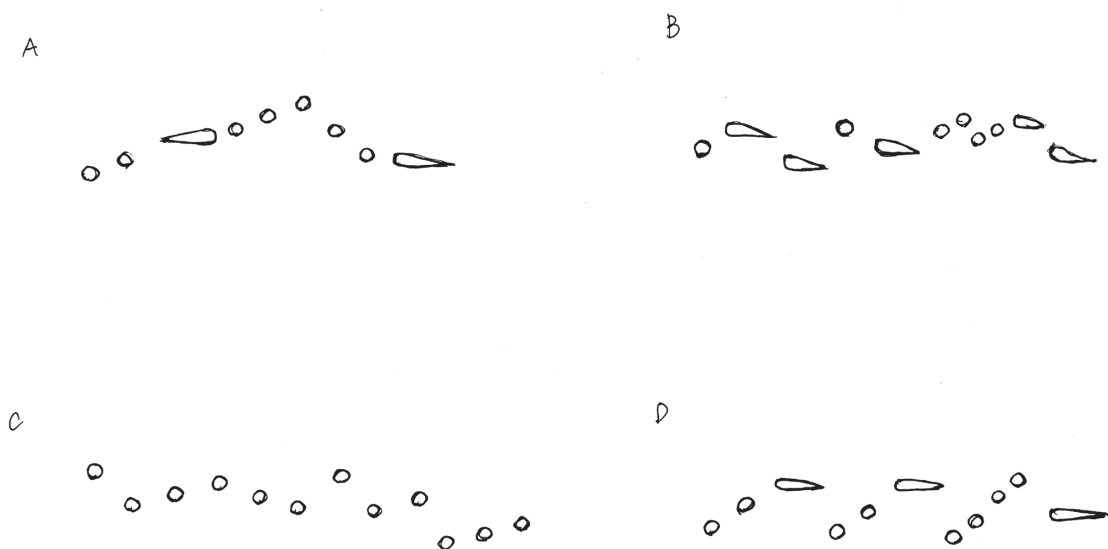


図3 アの部分で現れる4つの旋律の図形楽譜

これらアの部分の4つの旋律は、最初、以下の順番で登場する。

B→B→Bのリズムを用いた別の旋律→D→Bのリズムを用いた別の旋律→D→Dのかけら  
→A→A→B→B→Dのかけら→C→C→C→C→C→C→Dのかけら

反復されている部分は、演奏楽器の変化およびリズム伴奏や副旋律が加わるなどの変化を伴っている。また、「Bのリズムを用いた別の旋律」とは、Bの出だしのシンコペーションのリズムから成るもので、「Dのかけら」は、Dの旋律の最初の3音の部分であり、図2で示したこの曲のモチーフである。このように、4つの旋律は反復され、その中に様々な変化が含まれている。

## IV 大学生を対象とした授業実践

### 1 授業の概要

音楽鑑賞の授業を行うには、まずは教師自身が鑑賞曲を何度も聴いてその曲の要素や構造を理解し良さや面白さを実感し、その上で指導について考える必要がある。そこで、教員を目指す学生を対象に、彼ら自身がモチーフおよび旋律の反復や変化を把握し、指導法としての図形楽譜の活用効果について考えることを目的として「木星」の鑑賞において図形楽譜を用いた授業を行った。教職関係の音楽科の授業として、教育学部の学生全てが履修できるものに「初等音楽科教育学」とその単位を修得した学生が履修できる「音楽科内容論」がある。本実践は、2021年度前期「音楽科内容論」の中で行ったもので実践の概要は以下の通りである。

- (1) 目的：以下の仮説に基づいて授業を行いその妥当性を検証する。
- (2) 仮説：「木星」の鑑賞において図形楽譜を用いた学習指導を行うことにより、受講生はモチーフや旋律の反復と変化に気づき、鑑賞授業における図形楽譜活用の効果を実感できる。
- (3) 対象者：2021年度前期「音楽科内容論」受講生15名<sup>2)</sup>
- (4) 実施日：2021年5月14日および5月21日
- (5) 授業展開：2回の授業ともにZoomによるオンライン授業であり、授業後半30分程度は、日本音階についての学習を行ったため正味60分程度

5月14日（金）14時50分～16時20分

- ① 画面共有で考案した図形楽譜A、B、C、D（図3）を提示し、Aの部分の音楽を2回かけた。受講生は音楽の進行に沿ってどの図形があてはまるか考えた。
- ② もう一度音楽をかけ、新しい旋律が出てくる度に音楽を止めてどの図形があてはまるかを示し、B、D、A、Cの順に出てくることを確認しながら最初のA部分を聴いた。その後のイと再現されたAと終わりの部分は通して最後まで聴き、翌週までのレポート課題として以下の2点を提示した。
  - ・ホルスト作曲《惑星》より「木星」の構成「A→イ→A→終わりの部分」で、最初のAについて図形楽譜AからDの流れや再現部Aでの変化などについて考えたこと
  - ・この図形楽譜の活用について考えたこと（あまりよくない意見でも結構です）

5月21日（金）14時50分～16時20分

- ① 画面共有で図3を提示しながら音楽をかけ、最初のAの部分で旋律が反復したり変化したりする毎に音楽を停止し、どの図形楽譜かを確認して旋律の反復や変化（音高違い、リズムが同じで異なる旋律）およびモチーフを音楽に合わせて画面上の図形をなぞって説明した。イの旋律は図形楽譜Aに似ていることを音楽をかけながら確認した。
- ② 再現部のAからは、旋律が変わっても音楽を止めずに図形をなぞるだけで最後まで聴いた。翌週までのレポート課題として以下を提示した。
  - ・図形を見ながら「木星」を聴いてみて感じたこと

### 2 結果

筆者は、オンラインによる2時間の授業において、音楽をかけながら図形楽譜を提示し音楽の進行に沿って同時進行で4つの旋律のどれであるかを指し示すことが比較的容易にできた。

2回の授業後それぞれのレポート課題における意見を結果として示す（表2、表3）。1回目の授業では、Aの部分における4つの旋律の流れと再現部Aにおける旋律や楽器の変化について気づけ

たかを問うものと、図形楽譜の活用についての意見をレポート課題とした。アの部分における4つの旋律の流れについては、示されていても授業中に確認したB、D、A、Cの順であることだけで、それらの反復や変化について示されたレポートはなかった。再現部アにおける旋律や楽器の変化については、15人中10人が示しており、その内容は「楽器が増えた」が多く、その他「転調があった」「Cの部分はずっしりした感じから再現部ですごくやさしくなった」があり、2人だけが出だしでDが登場すること示していた。以上から1回目の授業では、旋律の反復と変化の気づきは、再現部ではある程度なされていたが、最初のアの部分ではあまりなされなかったことが明らかになった。しかし「アとイで似ている部分がある」が4名おり、モチーフについて把握している受講生がいることがわかる。また、「イの部分が図形楽譜Aのイメージが強くて繰り返されている」と示した受講生がいたが、このイの出だしの旋律は図形楽譜Aの旋律をアンダンテにした感じであることを田村(2004, p. 80)も述べている。

図形楽譜の活用に関しては、肯定的な意見として「特徴が捉えやすく聴きやすくなった」が15人中9人で、その「特徴」として挙げられたものは、「音の高低」「旋律の形やリズム」「音の長さや入り方・消え方」「曲の盛り上がり」である。「五線譜を読むのが苦手な子どもに良い」という意見には、「図形楽譜を提示した後に五線譜を提示し比較することにより読譜指導につなげることができる」という考えが示されていた。否定的な意見は「示されているもの以外の旋律が出てきたら混乱する」「判別が難しい」が複数あり、「判別」は、単純に判断できないというものと、音楽が速くて判別してられないというものがあつた。

表2 1回目の授業レポートの意見（複数回答あり）

図形楽譜の活用に対する肯定的意見	人数
特徴が捉えやすく聴きやすくなった。	9
五線譜を読むのが苦手な子どもに良い	2
音程を気にしないで旋律の動きに集中できる。	1
口三味線で旋律を捉えておいて、考えながら聴くのに良い	1
曲の流れが整理しやすい	1

図形楽譜の活用に対する否定的意見	人数
図示されているもの以外の旋律が出てきたら混乱する	4
判別が難しい	3
五線譜が分かる人には五線譜の方が情報が多いためどちらが良いとも言えない	1

聴いて気づいたことや、感想など	人数
アとイで似ている部分がある	4
AとDはなんとなくわかる	1
Cが一番わかりやすい	1
流れを追えなかったがD→B→A→Cの順で多く旋律を聞くことが出来た	1
AからDに音をつけて作曲のプチ体験が出来るのではないかと	1

表3 2回目の授業レポートの意見（複数回答あり）

図形を見ながら「木星」を聴いてみて感じたこと	人数
曲の流れや構造が捉えやすい、曲の構成が理解できた	7
音高が違って同じ旋律の反復に気づける	5
アとイが似ていることに気づきやすい モティーフに気づける	3
音の長さや入り方、消え方、曲の盛り上がりがイメージしやすい	2
リズムや音の高低、長さがわかりやすい	1
図形以外の部分にも着目できるように促す必要あり	1
構造の与えるイメージ（短い音が続くと跳ねる感じ、同じ旋律の要素が反復することで曲が構成されていること）がわかると曲づくりの活動にも生かされる。	1

2回目の授業では、まとめとして、図形を見ながら「木星」を聴いた感想をレポート課題とした。その結果、1回目の授業ではほとんどなかった「曲の流れや構造が捉えやすい」や「(各旋律を確認しながら聴いたことにより) 曲の構成が理解できた」など、曲の全体構造についての意識を7人が書いた。また「音高が違って同じ旋律の反復に気づける」は5人で、具体的には「リズムに意識できる」「同じ流れでも違う楽器が用いられていることに気づける」などの意見があった。

### 3 考察

第1回目授業の段階では、旋律の反復と変化の把握は、再現されたアの部分でのもので、その内容の多くは「楽器が増えた」という漠然としたものであり、最初のアの部分での反復と変化に対する気づきはなかった。また、図形楽譜の活用効果として「特徴が捉えやすく聴きやすくなった」は多く示されたが、本研究で着目している図形楽譜のアバウトであることの利点を活かして音高違いの同じモティーフや旋律、同じリズムで違う旋律などの存在に気づけるというような意見は、「音程を気にしないで旋律の動きに集中できる」のみであった。ただ、アとイのモティーフの統一性について気づいた受講生が数名いた。ところが2回目の授業後では、「音高が違って同じ旋律の反復に気づける」という意見が増え、また曲の全体構成が理解できたことが多く示された。今回は2回ともオンライン授業であったため、受講生の思考・判断の状況は、このようにレポートからしか把握できなかったが、以上から、仮説が概ね正しいことが示された。また、音楽をその都度停止して旋律の反復や変化について確認しながら聴いたことに対する肯定的な意見が多かったことは、図形楽譜の活用では、学習者が見て考えるだけでなく、図形を基に教師が説明することが重要であることが明らかとなった。

## V 小学生を対象とした授業実践

### 1 授業の概要

大学生の授業から、図形楽譜を用いた学習指導の効果が明らかになったため、小学校の授業でも旋律の反復と変化についての気づきや曲の構成の理解を促し、最終的に音楽を味わうことができることを目指し、図形楽譜を活用した授業を行った。また、教育の場で現在特に重視されている思考し判断する力を養うための材料として、この図形楽譜が有効であるかどうかについても明らかにすることを目指した。

(1) 目的：以下の仮説に基づいて授業を行いその妥当性を検証する。

(2) 仮説：「木星」の鑑賞において図形楽譜を用いた学習指導を行うことにより、子どもたちはモ

ティーフや旋律の反復と変化に気づくことができ、鑑賞活動における思考力・判断力育成の材料として図形楽譜は有効である。

- (3) 対象者：T小学校の6年生31名
- (4) 実施日：2021年6月11日および6月25日
- (5) 授業展開：2回の授業とも、小学校音楽担当教師により進められ、筆者は頻繁にかけたり止めたりを繰り返すCDの扱いを担当し適宜説明を加えた。

2021年6月11日（金）9時30分～10時15分（最初の10分はボディパーカッション）

- ① 教科書の組曲《惑星》より「木星」の部分を見る。「知っている人？」という発問に数名が手を挙げた。「聴けば知っている人いると思う」と教師。作曲者がホルストであることを確認し、ワークシートを配付。ホルストの工夫を見つけることが最終的な課題で、今日は、教科書にあるアの部分の4つの旋律を感じ取ることが目標であり、その旋律を図形で表したものをを用いて活動することを提示。
- ② 書画カメラでワークシートを写したのを見せながら音楽をかけた。子どもたちは最初の部分を聴いてどの図形が合うかを考えた。最初の旋律Bが出てきたところですぐにCDを止めたが、どの部分かわからなかったようなのでもう一度音楽をかけて、旋律Bが出てきたところで、「ここ！」と声をかけた。教師は、近くの友達と相談するよう促し、AからDのどれだと思ふかを挙手させた。最初は図形楽譜をどう見たら良いかわからない子どもが多かったようだが、友達と相談することにより図形楽譜の見方を把握したと考えられ、ほとんどの子どもがBを選んだ。
- ③ Bであることを筆者が口ずさんで図を指しながら説明。
- ④ もう一度最初から聴く。Bが2回出てきたことを確認しながら次の旋律を聴いた所でCDを一旦止めた。子どもたちはどの図形楽譜が当てはまるかわかりながら考えた。Dであることは、すぐに分かった子どもが多かった。クラスの2名くらいの子が「違う形で出てくる」と発言したため、この発言の観点で再びこの部分を聴いた。「音の高さが変わるが、図形楽譜に照らし合わせると同じであること」を多くの子どもが認識できたと教師は判断し、ワークシートに「何回も違う形で出てくる」と記載し書画カメラを通して子どもたちに示した。「音の高さが変わるけれど、同じ形って〇〇さんが言っていたけれどわかる？」と教師が投げかけると、うなずく子どもが多かった。
- ⑤ 続きから聴き、次がAの図形楽譜であることは、子どもたちはすぐに分かった。教師は子どものつぶやきを拾って「Aは2回くらい出てきて、Bっぽいのも出てくる」とワークシートに記入し書画カメラで提示した。
- ⑥ 続きから聴き、Cであることを確認し、アの部分の最後まで聴いた。
- ⑦ 「Cはどうだった？」の発問に「たくさん出てきた」という発言があり、「それらは同じだった？」の発問に「違う」という発言があったため、教師がワークシートに「何回もちがう形で出てくる」と示し、書画カメラで提示した。教師がワークシートに記入し書画カメラで提示した内容は、子どもたちは各自のワークシートに記入した。

2021年6月25日（金）9時30分～10時15分

- ① アの部分、4つの旋律の反復と変化について図形楽譜への書き込み（前回の授業で教師が「Bは2回」、「Dは何回もちがう形で出てくる」など示したことを）を基に復習。
- ② 書画カメラで写したワークシートの図形楽譜を、主な旋律が出てくる度に筆者は指し示し、



アの部分を1回通して聴取。

- ③ 「Cが何回も出てきたけど、気づいたことを図の近くに書こう」と教師が促しCを1回聴取。「気づいたことある？ 何を書いていいかわからない人いますか？」と発問。わからない子どもがいたため筆者は「何回か出てくる違いとか」と提示。Cの部分の2回目聴取後、数名の子どもが答え、教師がそれら（だいたい音を切っている、だんだん演奏している楽器がふえる、だんだん力強く大きく、だんだん音のはげしく、さいしょの1音が強い、上がり下りが多い、伸ばす音がなかった）を板書。楽器についての発言がなかったため、教師は「どんな楽器だった？」と発問しCの部分の3回目聴取。「タンタンタンはトランペットみたいので、ジャンジャンはバイオリンみたい」「ホルンがあった」などの発言があった。
- ④ Cが終わってイへのつなぎの部分からイの終わりまで聴き「何か気づいたことある？」と発問。「ゆっくり伸びていた」の発言。
- ⑤ アからイにかけて聴く。教師は、聴きながら「アとイを比べて気づいたこと」をワークシートの裏に書くよう指示。
- ⑥ ⑤で子どもが書いた内容は確認せず、再現部のアから、書画カメラで写したワークシートの図形楽譜を筆者が指し示しながら1回聴取。Cの部分で反応した子どもが多かったため、教師が「Cについて気づいた人？」と発問すると多くの挙手。
- ⑦ 終わりの部分を聴き「何か気づいた？」の投げかけに「速くなった」「前と似た感じのものがまた出てきた」というつぶやきがあった。
- ⑧ 終わりの部分の2回目聴取で「イが出てきた」のつぶやきがあった。

## 2 結果

仮説に関わる子どもたちの実際の様子とワークシートの記載を示す。音楽を聴いてどの図形楽譜が相応しいかを考える場面では、友達と相談する活動を取り入れたため、図形楽譜を用いながら話し合う姿が多く見受けられた。また、授業展開の様々な場面で、旋律の反復や変化に対する気づきのつぶやきがあり、再現部でCの旋律が出てきた時には、最初と再現部での違いに対する気づきとして、多くの子どもが顔を上げるなど身体的な反応をした。さらに、実際の聴こえてくる旋律と図形楽譜が一致した後は、教師や筆者が指示しなかったが、図形楽譜を鉛筆で追いながら聴く子どもが数名いた。

2回目の授業の最後には、ワークシートに「ホルストの工夫点」として自分の考えを記した。これは仮説にも関わり、旋律の反復と変化をホルストの工夫に示す子どもがどれだけいるかを明らかにするものであった。結果をまとめたものが表4であり、「リズムや旋律の反復と変化」と記載した子どもはクラスの約3分の1であった。

表4 ホルストの工夫点（複数回答あり）

ホルストの工夫点	人数
リズムや旋律の反復と変化	10
色々な楽器を合わせて	5
音の高低	5
アの部分とイの部分を変える	4
速度	4
強弱	3
音の長短	3
様々な旋律	2
人を楽しませる、リラックスさせる	2
最後にイを入れる	1
音の重なり	1
楽しく明るい	1
リズム感	1

### 3 考察

ホルストの工夫点として「リズムや旋律の反復と変化」を挙げた子どもは約3分の1であったが、子どもたちは、旋律の反復や変化に対する気づきをつぶやいたり身体反応として表したりした。また、子ども同士の意見交換が図形楽譜を介して行われたり、図形楽譜の図形を鉛筆でなぞりながら音楽を聴いたりする姿も見ることができ、これらから仮説は、概ね正しいことが示された。大学生の授業で、音楽を聴きながら図形楽譜を見るだけでなく、途中で音楽を停止して旋律の反復や変化について図形楽譜で確認しながら聴くことが好評であったが、小学生の授業では、それに加えて友達と話し合う時間も設けた。その話し合いの後、正解の図形楽譜を確認し、もう一度聴く中で旋律の反復や変化に対する子どものつぶやき生まれていた。様々な活動を取り入れながら聴くことを繰り返す中での思考・判断により、モチーフや旋律の反復と変化に対する気づきがなされているのではないだろうか。

## VI おわりに

音楽の構成において旋律の反復と変化は、ほとんどの曲に存在する。しかし、今回取り上げた「木星」は、複数の旋律の反復と変化の連続であり、それらの旋律の骨格にあたるモチーフは、気がつけば至る所に存在することを聴き取ることができる。その気づきを与える一助として、図形楽譜と図形楽譜を基に音楽の進行に即した教師の説明が有効であることが明らかとなった。今後は、様々な対象者で実践を行い、効果をより明らかにし、少ない学校音楽科授業の中での活用を促せるよう短時間で効果的な学習指導の展開を示したい。また、大学生の感想にあった「同じ旋律の要素が反復することで曲が構成されていることがわかると曲づくりの活動にも生かされる」は、モチーフの理解と音楽づくりにおけるモチーフの重要性の認識であり、このような鑑賞活動を音楽づくりへつなげることも視野に入れて実践を続けていきたい。

【付記】本研究の小学校授業実践をご担当いただき、子どもの学習状況の把握などご助言いただいた蓮沼澄子先生に衷心より感謝申し上げます。

本研究は、科研費（課題番号17K04760）の一部である。

### 注釈

- 1) 小島（2014）の小・中学校教員に対して行った調査では、音楽鑑賞指導で用いる視覚的な方法について質問したところ、音楽を聴きながら図形を描くことは小学校の教員の約2割が用いていた。「図形楽譜を見る」は選択肢になかったが、「その他」として自由記述できる部分にも全く記載がなかった。
- 2) 15名の受講生のうち、学校音楽授業以外での音楽活動経験者は14名（そのうち音楽専攻学生は1名）で、未経験者は1名である。

### 参考文献

- 1) 小原光一他（2019検定，2020発行）『小学生のおんがく1』教育芸術社．
- 2) 小原光一他（2019検定，2020発行）『小学生の音楽2』教育芸術社．
- 3) 小原光一他（2019検定，2020発行）『小学生の音楽3』教育芸術社．
- 4) 小原光一他（2019検定，2020発行）『小学生の音楽4』教育芸術社．
- 5) 小原光一他（2019検定，2020発行）『小学生の音楽5』教育芸術社．

- 6) 小原光一他 (2019 検定, 2020 発行) 『小学生の音楽 6』教育芸術社.
- 7) 小原光一他 (2020) 『小学生のおんがく 1 教師用指導書 研究編』教育芸術社.
- 8) 小原光一他 (2020) 『小学生の音楽 2 教師用指導書 研究編』教育芸術社.
- 9) 小原光一他 (2020) 『小学生の音楽 3 教師用指導書 研究編』教育芸術社.
- 10) 小原光一他 (2020) 『小学生の音楽 4 教師用指導書 研究編』教育芸術社.
- 11) 小原光一他 (2020) 『小学生の音楽 5 教師用指導書 研究編』教育芸術社.
- 12) 小原光一他 (2020) 『小学生の音楽 6 教師用指導書 研究編』教育芸術社.
- 13) 小島千か (2014) 「音楽鑑賞授業における音楽の要素や構造を把握させる指導に関する調査」『山梨大学教育人間科学部紀要』第 15 巻, pp. 317-328.
- 14) 小島千か (2017) 「音楽鑑賞教育における音楽の視覚化の活用」『芸術表現教育の授業づくり』pp. 265-276, 三元社.
- 15) 小島律子編著 (2011) 『子どもが活動する新しい鑑賞授業 音楽を聴いて図形で表現してみよう』音楽之友社.
- 16) 田村和紀夫 (2004) 『新音楽鑑賞法 名曲に何を聴くか～音楽理解のための分析的アプローチ』音楽之友社.
- 17) 新実徳英他 (2019 検定, 2020 発行) 『音楽のおくりもの 2』教育出版.
- 18) 新実徳英他 (2019 検定, 2020 発行) 『音楽のおくりもの 3』教育出版.
- 19) 新実徳英他 (2019 検定, 2020 発行) 『音楽のおくりもの 5』教育出版.
- 20) Kojima, C. (2020) . Taking into Account Individual Differences in Music Listening Activities by Using Visual Representations of Music. *Proceedings of the International Society for Music Education, 34th World Conference on Music Education (ISME)*, 207-211.
- 21) Graça Boal Palheiros, Jos Wuytack. (2006). Effects of the ‘musicogram’ on children’s musical perception and learning. 9th International Conference on Music Perception and Cognition.